

長田華子著

『バングラデシュの工業化と
ジェンダー——日系縫製企業の国
際移転——』

御茶の水書房 2014年 xxii + 313 ページ

みなみ で かず よ
南 出 和 余

I

21世紀に入って以降、バングラデシュの経済成長率は年率6パーセント前後を推移し、かつて「アジアの最貧国」と称された同国は、現在ではBRICsに続いて経済成長の潜在性を有する「ネクスト11」のひとつと目されるようになった。とくに縫製産業の輸出では中国に続く世界第2位となり、日本企業を含め、新たな投資先として海外からの関心を集めている。本書は、まさにこの動向に正面から挑もうとする意欲的な著書である。

本書は、著者の長田華子氏が2012年にお茶の水女子大学に提出された学位論文をもととした研究書である。学位取得からわずか1年未満で刊行されたのは、著者の努力はもちろん、上記のバングラデシュ及び日本企業を取り巻く現状において少しでも早くに公開し、「現場の理解」に寄与したいという著者の熱い思いの賜物といえよう。それは本書「はじめに」のなかで述べられているように、バングラデシュに進出する企業はもとより、企業の進出やMade in Bangladesh製品の増加によって日本の人々にも身近になりつつあるバングラデシュの地域理解を促したいとの思いに導かれたものである。さらには、日本企業の進出の在り方や関心の持ち方が、バングラデシュのジェンダー構造を改変しようという意識のもと、そのよりよい在り方に一声を投げようとするものである。

こうした本書の意図を前提としたうえで、本書を分野的に位置づけるならば、バングラデシュ地域研究と地域経済学的日本企業研究を橋渡しするような位置にあるといえるだろう。そのなかでジェンダーの視点を分析に用いている。評者は、前者バングラデシュ地域研究の立場においては自らバングラデシュで人類学研究に従事しているため、いくらか本書の特徴を読みとれるのだが、後者の日本企業研究に関してはまったく知識をもたないがゆえに、その点の指摘があまくなることを先に断っておく。まずは各章の概要を若干の感想を含めて述べたうえで、本書全体に対する評者のコメントをいくつか述べてみたい。本書は全8章から構成されており、1章の序論に続いて2章から4章までが文献にもとづくバングラデシュ理解、5章から7章までが著者の調査によるバングラデシュに進出する日系企業の事例および分析となっている。

II

まず第1章では、研究の目的や方法、分析の理論的枠組みが述べられている。端的にいえば、女性参画の政策と実態がどのようにバングラデシュの工業化に寄与し、また工業化が当該社会のジェンダー構造にいかなる影響をもたらすかを明らかにするのが本書の目的とされる。とはいえ、バングラデシュの工業化にはグローバル経済が色濃く反映されるため、海外企業の国際移転という背景についても考慮を要する。第1章4節における分析のための理論的枠組みにはそのダイナミクスを捉えようとする心意気をみることができる。

第2章では、背景としてのバングラデシュ理解を、とくに政治と経済政策から追っている。1971年にパキスタンから独立したバングラデシュは、国家としての歴史が40年余りと未だ浅いため、政治経済的動向を追うのに、全体をレビューすることが可能である。日本国内に限ってもアジア経済研究所を中心にバングラデシュの各時代の動向に関する詳細な調査報告がなされており、本書ではそうした文献を最大限に活用したレビューがなされている。バングラデシュに馴染みの薄い読者にとっては情報豊かな紹介といえるだろう。しかし、本書を学術書として読む場合、各研究報告で述べられている事実を

抜き出して並べる記述に若干の違和感もある。とくに政治的な動きに関しては論文の意図が記述に反映されるため、それらを文献として用いるにあたっては、本書がどのような視点からバングラデシュ地域研究を捉えようとしているかを明らかにする必要があるだろう。著者によるバングラデシュ政治経済に関する見解が含まれているとよかったのかもしれない。

続く第3章は、バングラデシュの工業化に焦点を当ててレビューがなされる。既述のように本書の視点として、バングラデシュの工業化を海外企業の進出抜きには語れないということが、本章の工業化の動向において明示される。とくに興味深いのは第3章4節で紹介される韓国企業のバングラデシュ進出とそれに端を発した現地企業家の広がりである。

第4章では、労働力としての女性の動員について、政策と実態の両面からレビューされている。第2章4節の「独立後の女性政策」では、独立後のバングラデシュが構造調整政策において海外からのコンディショナリティを強く受け、そのなかで「ジェンダーと開発」が象徴的に取り組まれてきたことが述べられていた。本章で紹介される縫製産業における女性労働力の動態は、女性が工業労働力として重要な担い手となった点では女性の社会進出といえるが、一方で、それが単に「低賃金」で「従順」な労働者需要を満たす立場に過ぎないという点においては「ジェンダーと開発」理念、つまりは社会全体のジェンダー構造改革にはなっていないことがみてとれる。しかし、そこで著者がバングラデシュにおけるジェンダー規範として取り上げているのが「パルダ」である。「パルダ」についての説明は本書135ページで述べられているのでここでは繰り返さないが、バングラデシュ農村部でフィールドワークをする評者にとっては、はたしてバングラデシュのジェンダー規範を語るとき、否応なくパルダを出発点としてよいのかという疑問が残る。ことに、著者がその根拠としているのは、1975年に書かれたジャハンの研究から60年代から80年代にかけてバングラデシュ地域で先駆的な人類学調査を実施した原忠彦氏らの文献がもととなっている [Jahan 1975; 原1981; 1989など]。社会における規範がそう簡単に変わるものではないという意味では文献の古さが問題になるわけではないが、いずれの先行研究におい

ても、人々の行為規範を説明する一概念としてパルダが用いられているのであって、それを出発点として、かつ時代を超えて本質論的にパルダを取り上げるのは若干危険な気がする。本書がジェンダー研究に主眼をおくにあたっては、バングラデシュのジェンダー研究を再考する余地があるだろう。と同時に、同社会の地域研究に携わる評者としては、1980年代以降の急激な社会変動のなかにあつて原忠彦氏がされてきたように、その社会の生活世界をきちんと記述するという作業を怠っているがゆえではないかと反省する点でもある。

さて、ここまでは文献にもとづく研究であったが、続く第5章からがいよいよ著者独自の調査と分析による本書の中心である。まず第5章では、金融危機後の日本企業の国際移転の事例としてマツオカコーポレーションを調査対象として、会社の概要から、中国、バングラデシュへの工場移転、そしてバングラデシュ工場における生産労働過程の詳細なデータが述べられている。縫製業は、日本も含めてアジアの経済成長過程に広く共通する分野といえるが、このマツオカコーポレーションの歩みは日本の縫製業の戦略の歴史を象徴する事例として非常に興味深い。著者が同社での調査を依頼し、それを快く受け入れてもらえたときの興奮は想像に難しくない。同社の日本から中国への技術移転、さらに中国からバングラデシュへの二次移転という経緯こそが、本書に力学的な分析をもたらしている。そのなかで、技術がどのように伝達されているかを、バングラデシュ工場における生産過程と労働状況を詳細に描くことで捉えようとしている。

続く第6章は、そこで働く女性労働者数人の事例をとりあげ、彼女たちの家庭背景および世帯における役割と、技術熟練度と賃金査定との関連を分析している。家族構成や仕送り等世帯保持についてはインタビュー調査を基本としているが、前章において著者が自らの目で彼女たちの技術や働きぶりを観察しているからこそ、その間の分析が可能となっている。各事例をみれば、女性が働く理由や家族のなかでの位置づけ、さらには個としての生き方において、明らかな社会変化をみることができる。

第7章では、今度は「技術移転」という企業側の視点からの分析がなされる。事例としているマツオカコーポレーションの場合、「第一次企業内技術移

転」として日本から中国への移転を開始したのは1990年代で、その後、中国で独資企業を持つようになって、生産技術の向上とともに生産品も多様化する。バングラデシュへの第二次移転は日本から直接移転されたのではなく、この中国工場からの二次移転であるという点に特徴がある。このなかで著者が注目するのは、中国工場から技術者としてバングラデシュに派遣された女性たちが象徴する、中国工場における技術者の育成および昇進昇級システムと、バングラデシュの組織構造の相違である。中国工場では工員として働く女性のなかから日本本社での研修制度に参加する者が出て、研修を受けた者が技術者として昇進し指導にあたる。それに対してバングラデシュの工場では、女性が大多数を占める縫製工員間に査定にもとづく分担や給与の差が多少はあるものの、各部門の責任者や品質検査はたいいていの場合が男性で、そうした男性たちには縫製工員としての経験がほとんどない。そのことが、たとえば品質検査をする男性が縫製の細部に目を配り、問題を見極めることを妨げていると指摘する。そして、中国から派遣された技術指導者の女性たちは縫製工員に直接指導をするが、チェック機能を果たす幹部に技術知識が浸透しなければ、品質の向上には限界がある。また、日本から中国への第一次移転の際には長期研修制度において日本語を習得したうえで技術を学ぶ仕組みがあったが、第二次移転では中国からの派遣技術指導者がベンガル語を習得して指導にあたるわけではないことから、技術移転における言語の壁もあるという。

これらの視点を含めて第8章では、本書の議論の整理とともに、著者なりの日系縫製企業への提言が述べられる。日系企業にとっても、またバングラデシュの発展にとっても有用な戦略を立てるというのは決して容易ではないが、日本から中国への第一次移転と、中国からバングラデシュへの第二次移転を見比べることで、改善改良の余地が見いだせることを指摘している。自らの研究が、調査を受け入れてくれた企業や社会に何らかの役に立つことを願って、勇気をもって提言を述べていることは称賛に値する。

III

以上の内容を踏まえて、全体として評者が気になったこと、あえてもっと知りたいと思ったことを2, 3述べておきたい。

まずは、全体の構成において、文献研究の前半と、調査にもとづく事例研究の間に若干のずれがあるような気がした。前述のように、本書の中心は後半の日系縫製企業のバングラデシュへの技術移転と、そこで問題となるジェンダーバイアスである。そのなかでは、バングラデシュ、中国、そして日本企業の文化がダイナミックに絡み合っている。技術移転が単なる伝達の問題ではなく、それを担うアクターの性別や企業の組織構造が大きく関係していることが本書の醍醐味といえよう。だとすれば、背景として気になるのはバングラデシュの工業化の経緯だけではなく、むしろ、日本や中国の企業文化である。バングラデシュを舞台に三者が出会うところでのミスマッチの原因を、バングラデシュの女性の立場やジェンダー規範のみに捉えているが、なぜ日本から中国への技術移転が文化的に成功したのか、それをそのままバングラデシュに持ってくるのがはたしてこの社会にあうのか、バングラデシュの社会にあった技術移転の方法が、日本から中国への移転とは全く異なったものとしてありえる可能性はないか、などといった点が気になるところである。

次に、評者が本書でもっとも興味深かったのは、第7章の昇進システムにおける中国とバングラデシュの相違という点である。品質検査部門や幹部につく男性は最初から幹部で、女性は常に縫製工員であるという。この点について、評者が自らの調査経験から思いつくことを述べておきたい。評者はバングラデシュの農村から都市近郊の縫製工場に出稼ぎに出る若者たちを追っているのだが、とくに男子に顕著に見られる傾向として、工場間の頻繁な異動がある。現在、バングラデシュの縫製工場はその数と規模を着実に拡大しており、労働者にとって仕事は引手数多である。彼らは、最初は親戚や同郷者の伝手で都市に働きに出るが、自らのネットワークができると、職歴を武器に工場を次々と異動する。異動することで給料は確実に上がっていく。仕事の楽しさやポジションも異動の動機となる。縫製工場働く

20代前半の若年労働者を見ると、男性のほうが未婚率が高い。未婚の男性たちは、都市に住む親戚の家に居候をさせてもらうか、おもに同郷者たち数人で部屋を共有して生活しており、家族をともなって暮らす女性たちよりも身軽である。そのため転職による住居移動も容易にできる。本書が対象としたのは外資系企業であるがゆえに、労働環境が地元企業に比べると画然によく、そのことに満足して異動があまり見られないということもあるが、異動における昇進昇級を基本とするバングラデシュの縫製業全体からいえば、ジェンダーによる差異は、こうした異動によっても説明できるかもしれない。現に、本書に登場する事例のなかに、友人たちと同居しながら自らのために働く女性の事例があった。こうした女性たちのモビリティが今後どのように広がっていくのかも注目されたい。

さらに縫製業に関してもう一点付け加えるならば、縫製業就労に対するイメージの変化である。縫製業が低賃金で重労働であるとのイメージはバングラデシュ内外に共通している。しかし、農村から都市へ働きに出る若者たちにとって、これだけ縫製業が一般化するなかで、どの部門でどのような仕事をしているかも重要になりつつある。「スーパーバイザー」とよばれる品質検査に就いていることは、縫製工員として働くのとは明らかに差異化される。本書で述べられているように、品質検査以上の幹部はほとんどが男性によって占められているため女性から「スーパーバイザー」という言及を聞くことはごく限られるが、男性にとって「スーパーバイザー」がステイタスとなるように、女性に幹部への道が開かれれば、女性の縫製業就労に対するイメージも次第に変化するだろう。その意味でも、女性の昇進シ

ステムは、当該社会の女性就労に明らかな変化をもたらしうると考える。

最後に、本書の今後の展開に対する評者の個人的な期待を述べておきたい。南アジアにおける女性の社会参画に目をやると、必ずしも「男性社会への女性の参加」を意味しないように思う。それは、村落開発でリーダーシップを発揮する女性も、オフィスで働く女性も、あるいは各学校で教鞭をとる女性教師たちも、その颯爽とした姿が常にサリートを纏っていることに象徴されるように、女性としての女性の地位向上を目指す動きがある。その姿は同じ女性たちにとっての憧れとなり、南アジア的フェミニズムを巻き起こす。縫製業の普及によって社会に出てきた女性たちが、そうしたバングラデシュの女性の参画の在り方にどのように繋がって行けるのか、著者の今後の研究の展開を大いに楽しみにしている。

文献リスト

<日本語文献>

- 原忠彦 1981. 「バングラデシュの男と女 (1)」『世界と人口』(91)30-37.
 —— 1989. 「バングラデシュの女性——被扶養者として債権者として」『遡河』13-25.

<英語文献>

- Jahan, Rounaq, 1975. "Women in Bangladesh." Women for Women: Bangladesh 1975. Dhaka : The University Press Limited.

(桃山学院大学国際教養学部准教授)